

## AI時代の文学研究・私感

光石 亜由美

二〇二五年五月一〇日に開催された山口大学人文学部国語国文学

会の第五〇回総会・研究発表会の「卒業・修了生によるエピソード・トーク」に参加するため、久しぶりに母校・山口大学を訪れた。大学のエントランス、食堂、人文学部の校舎も新しくなり、驚くことばかりだったが、人文学部棟から見える姫山の風景はそのままで、会場となった講義室も当時の面影を残しており、少し安心して、大学時代の思い出を語るエピソード・トークを始めることができた。

その時にも、少し触れたのだが、会場となった講義棟は、数十年前、私が、大学入試を受けた試験会場だった。おそらく、国立大学でも推薦入試を導入しはじめた時期で、試験科目は小論文と共通一次試験（今の、大学入学共通テスト）の五科目だった。小論文対策をするために過去問を取り寄せた。過去問で出題された文章で記憶しているのは、奈良県出身の日本浪曼派の作家・保田與重郎の「日本の橋」が出ていたことだ。高校生にとっては、非常に難解な文章で、理解するのも大変。しかも文章が長い。あとから考えると、故・水本精一郎先生の出題だと思っ（水本先生、高校生に保田與重郎は難しすぎますよ……）。必死に読んで、小論文を書く訓練をし

て試験に臨んだ。

さて、試験当日、今年はどうな文章が出るのだろうかと緊張していたら、おもむろに、英語とおそらくラテン語（？）の文章が書かれた一枚の紙が配られた。そして、背の高い男性の先生（あとから思えば哲学科の先生）が、「これから講義を始めます。講義を聞いて、小論文を書いてください。」と言われ、突然、ギリシア・ローマ哲学の講義が始まった。その年から、出題形式が変わったのだ。今でこそ、体験講義を聞いて小論文を書いたり、グループ・ディスカッションをしたりする総合型選抜形式の選抜方法は一般的だが、数十年前の山口大学のこの試験は、当時としては、相当、斬新だったと思う。

それから、大学院を出て、韓国の大学を経て、私立の大学に奉職してから、入試関連業務にも携わるようになった。近年では入試制度が多様化している。多様な学生を受け入れようとする大学の意図と、自分の特性にあった入試方法を選べるという点では、大学と志願者双方にメリットはあるだろう（ただし、私立大学においては選抜方法が複雑化して、現場はやや疲弊気味。受験生も情報収集が大

変らろうと思う)。

大学入試における選抜方法、及び入試問題は、大学から受験生に向けてのメッセージである。うちの大学はこういう特色がありますよ、だから、こうした能力ある学生さんに来てほしいというメッセージである(保田興重郎くらしい読めない)、山口大学に入れませんよ、というメッセージだったんですね。水本先生)。

大学の入試選抜方法もそうだが、少子化時代、AI時代の到来など、大学を取り巻く環境は激変期に入っている。そして、時代の変化に伴って、大学に求められる役割も大きく変化している。

二〇一八年に中央教育審議会によって検討された「二〇四〇年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」では、予測不可能な時代の変化に柔軟な対応ができる人材の輩出を高等教育に求めている。そして、そこでは「学修者本位の教育への転換」が謳われている。今後実現すべき高等教育が目指すべき方向性の三つのうち、「学修者が「何を学び、身に付けることができるのか」を明確にし、学修の成果を学修者が実感できる教育を行っていくこと。このための多様な柔軟な教育研究体制が各高等教育機関に準備され、このような教育が行われていることを確認できる質の保証の在り方へ転換されていくこと。」が第一に掲げられている。

つまり、昨今、「どの大学に入るか」も重要だが、そこで「何が学べるか」「何を身につけることができるか」が大きなポイントとなっているのだ。

国語国文学会のエピソード・トークの質疑応答でも、高校の先生から「文学を学ぶ意義とは何か?」という質問があった。「国語」や「文学」を学ぶことで、「何を身につけることができるか」とい

う問いであり、「国語」や「文学」が、現代社会に、そしてこれから先の不透明な未来に生きる若者たちの役に立つのかという問いかけである。

一九九〇年以降の大学改革では、国立大学が独立行政法人化(二〇〇四年)、民間からの競争的資金の積極的導入が目指され、産官学連携の研究がしやすい分野が尊重され、「儲かる」理系／儲からない」文系(吉見俊哉『文系学部廃止』の衝撃)集英社新書、二〇一六年)という対立構図が浮き彫りになった。そして、文系不要論もささやかれた。最近では、文部科学省は、二〇四〇年までに理系の生徒の割合を現在の三割から四割に引き上げるために、理系学部を設置する大学への支援強化を進めている。

こうした「学修者本位の教育への転換」、理系重視の背景には、「本格的な人口減少社会の到来」と、「Society5.0・第四次産業革命」(二〇四〇年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申))——AI時代への危惧がある。AIの普及によって、残る仕事、消える仕事、といったニュースも耳にする。

一九九〇年以降の「文学は役に立つのか」に加え、「AI時代における文学の意義とは」という課題を文学研究、文学教育は突きつけられているといえよう。

ChatGPTなどの大規模言語モデルを用いた対話型生成AIサービス、汎用人工知能の技術はまだ発展途上である。これからどうなるのか、よくわからない。学習現場では、ChatGPTの学習への導入の可否、人工知能で書かれたレポートが出てきたらどうするか、など対処しなければならぬ問題は山積みである。

ChatGPTなどの汎用人工知能は、大量の文章を要約したり、瞬

時に翻訳したり、得意な部分もあるが、ハルシネーション（事実に戻つかない回答）を起こしたり、著作権に抵触する恐れのあるデータを出すことがある。実際、私も試しに、ChatGPTに「〇〇についての文献はないか？」と聞いてみたことがある。そしたら、ChatGPTは全く存在しない文献を教えた。「そんな文献はないじゃないか」やChatGPTに文句をいうと、ChatGPTは、殊勝にも「すみません」と謝って、なぜ、人工知能が誤った情報を出すのか、ハルシネーションの仕組みを丁寧に説明してくれた。そして、「次の文献は確実にあります」と自信たっぷりに答えてきたが、その文献も存在しなかった——という人間不信、いや、AI不信に陥った経験がある。情報の真偽を確かめるファクトチェックが重要になることを痛感した。研究の基本である調査・分析能力は、これまで以上に求められるであろう。

そうした基本姿勢の上で、自ら問いを立て、分析し、論じてゆく、というゼミの発表や卒業論文は、機械任せにはできない実践である。ChatGPTは論文を瞬時に要約してくれる。しかし、論文を読むという行為は、論述の仕方、表現方法、どういった文献を参照しているのかという細部を見ることが、自らの力になる。汎用人工知能を使って要約だけで満足すると、論文を読み込むインプット作業から得られるものを失ってしまうだろう。研究は「タイプA」が悪くて上等！なのである。不合理や矛盾や無駄に耐え抜く力が研究には必要なのだと思う。それは、AI時代に逆行しているかもしれないが、むしろ、AIが明快に何事も処理してくれる（ように見える）時代こそ、耐え抜く力、踏み止まる力、あれこれ迷う力が貴重になるだろう。

また、文学研究でも大規模言語モデル（LLM）を使用した研究、デジタル・ヒューマニティーズ（DH）の流れが来ている。AIで文学テキストは解読できるか——これも発展途上の課題である。九段理江の作品のようにAIとの対話で書いた小説も登場しはじめている。DH研究の流れは無視できないものになるであろうが、AIによつてできること、できないことは注視しておく必要がある。

また、「国語」や「文学」を学ぶことで、「何を身につけることができるか」という問いかけについて、今、私の中にある答えは、「文学テキストに書かれていないことはないから、何でも学べる」というものだ。——人間の生き死にも、美しさや醜さも、愛情や憎悪も、古今東西の文学テキストは、予測不可能な未来を生き抜く上で、バーチャル体験の宝庫である。文学テキストの読みは、多様である。ゼミの場で、他人の解釈と自分の解釈をぶつけあうこと——これは、学生時代、山口大学のゼミで激しく学んだことである——多様性に関われた世界を体験することは、他者との共存が求められる現代社会において必須の能力であると思う。一つの出来事を多角的に解釈する読解力と、新しい世界をシミュレーションする創造性と、価値観の異なる相手と共存する包括力を鍛えることは、文学研究の得意とするところだ。AI時代であるからこそ、「国語」や「文学」にできることがあるのではないだろうか。

（みつしいし・あゆみ）